126 トッパンホールプレス
［Nov. 2023］隔月発行

TOPPAN HALL PRESS

ペーター・ブルンズ（2011.7.2）© 大窪道治

Artist Interview

日下紗矢子（ヴァイオリン）
表現の翼を自由に拡げ、音楽に没頭できるひとときを
トッパンホール ニューイヤーコンサート 2024
ペーター・ブルンズ（チェロ）／フローリアン・ウーリヒ（ピアノ）

ズラトミール・ファン（チェロ）＆ アレクサンドル・カントロフ（ピアノ）
奇跡のコラボレーションが浮き彫りにする、真の“デュオ”　柴田克彦

フォーレ四重奏団の“いま”　長木誠司

［ Schedule 2023.11～2024.3 ］

［ Information ］

鈴木優人（チェンバロ） J.S.Bachを弾く 3 ― 平均律第2巻

2023/2024シーズン主催公演［後期］ラインナップ最新一覧

ランチタイムコンサート Vol.125 大瀧拓哉（ピアノ）／髙木凜々子＆エヴァン・ウォン デュオ リサイタル

日下紗矢子

表現の翼を自由に拡げ
音楽に没頭できる
ひとときを楽しみたい

2024 NEW YEAR CONCERT
TOPPAN HALL

〈日下紗矢子 ヴァイオリンの地平〉最終回以来、5年ぶりの登場となる今回。ヨーロッパと日本を行き来するハードなスケジュールの合間を縫って、〈エスポワール〉シリーズをきっかけに今も共演を重ねるペーター・ブルンズ（チェロ）、再共演を願っていたというフローリアン・ウーリヒ（ピアノ）や今回のプログラムについて、お話しいただきました。

──コロナ禍での出演キャンセル3回を経て、ようやくですね。お帰りなさい。

本当に。充実したステージの記憶がたくさんあるトッパンホールで、今回もすごく楽しみにしています。

──今回は日下さんの清々しいキャラクターにふさわしく、新年の幕開けをお願いしました。ピアノ・トリオは弾かれることがありますか？

はい。ペーター（・ブルンズ）とはよく共演していますし、フローリアン（・ウーリヒ）とも一度メンデルスゾーンを弾いています。

──日下さんなのでチェロは当然のようにブルンズ。おふたりならと、曲はブラームスとメンデルスゾーンをご提案しました。

ブラームスの1番はチェロではじまる曲ですが、出だしのペーターの音を聴くたびに「あぁ、最高！」と思います。彼と共演するのはいつもとても幸せで、トッパンホールでこの曲をペーターと弾けるのはものすごく嬉しい。メンデルスゾーンも〈エスポワール〉のときに一緒に演奏していますし、今度はピアノがフローリアンなのがまた楽しみです。

──ウーリヒは、日下さんのご推薦です。

どんなピアニストか知らずに、去年初めて共演した方です。その時の曲目が今回のメンデルスゾーンで、ソナタもご一緒したのですがとっても素晴らしくて、またぜひにと願っていました。そうしたらペーターも共演歴があって、彼をよく知っていましたね。

フローリアンは何でも弾けてしまうすごいピアニストで、去年の共演ではデュプレクス（二段鍵盤ピアノ）を弾いたんですよ。鍵盤が非常に重たくてとても珍しい楽器です。

2011年7月2日「日下紗矢子〈エスポワール〉Vol.2」公演より

リハーサルの時は普通のピアノで弾いていたのに、本番はデュプレクスで、こともなげに。高度なテクニックを持っているからこそ、音楽がごく自然に響くのでしょうね。とても繊細な感性の持ち主で、相手がどう弾きたいかを受け取る感覚も非常に鋭い。音楽のないところに音楽をつくれるような…、ちょっと魔法のような面白さを持つピアニストです。

──彼にはソロで《子供の情景》を弾いてもらいます。ブラームスとメンデルスゾーンを繋ぐ意味もありますが、シューマンらしさを出しながら、すごく自然な音楽を聴かせてくれそうです。ブルンズさんとのトリオも、実に楽しみです。

ペーターもとても自然な音楽を奏でる人ですし、的確に相手の呼吸を受けとめますから、相性は抜群だと思います。私はペーターと弾いていると、とても心がトキメキます。彼の音楽はすごくポジティブなので、息を合わせていると私も前向きになって気持ちが高揚してくる。そのうえ、自分を伸び伸び表現できる。そういう音楽家、共演者にはなかなかめぐり会えません。いま、少し先まで一緒の演奏会が決まっていて、もう、それだけで幸せなほどです。

──日下さんにとって、特別な存在ですね。

彼は…たぶんですけれど、自分に似たところがあるのかなと思います。表現することにとても自由に向き合っている。すごく物知りで、バロックスタイルも追求すれば、モダンにも詳しいし、多くの研究に裏付けられた知識に基づいて、自身の自由な表現、可能性をぐんぐん拓いていく音楽家です。そういう点にとても共感します。

──そのおふたりで、今回はシュルホフも弾いていただきます。

シュルホフは、〈エスポワール〉のときに毎回プログラムに入れて以降、弾き続けている作曲家です。そしてそれ以来、ペーターとしか弾いていないのでは、というほど彼と一緒に演奏しているんですよね。ペーターとは2011年に〈エスポワール〉で共演したのが初めてですから、12年…まだそんなでしたっけ。

──ずっと、音楽の相棒という感じですよね。

私はそう思っていますが、彼はどうでしょう（笑）。でもブラームスの1番の出だしは本当、次のヴァイオリンは聴かなくてもいいというくらい、いちばんの聴かせどころは、チェロではじまる冒頭、最初のフレーズなんです。本当に素晴らしい曲ですが、何より、ペーターの弾くあの冒頭を聴いていただきたいです！

──メンデルスゾーンはいかがでしょう。

メンデルスゾーンについては最近、メンデルスゾーンのトリオやヴァイオリン・ソナタが、いかにユダヤの昔の歌と結びついているかを確かめるプロジェクトというのに、ペーターと参加しました。よく知られるようにメンデルスゾーンはユダヤの家系で、子どもの頃におばあさんから、ユダヤの歌をたくさん聴かされていたらしいのです。そのメロディーが彼の音楽のなかでいかに活かされ、さらに今日に至るまでどう発展しているのか、演奏会を通してユダヤの歌手と共演しながらそれを探る、という企画だったのですが、その経験を通していろいろな気づきがあり、新しい目を開かされました。

──日下さんはもともと、メンデルスゾーンがお好きですよね。彼の音楽には清々しさを感じますが、それがまた日下さんの清々しい印象と結びついている気がします。

音楽と真摯に、生き生きと向き合うお三方が集まって、それぞれの解釈をキャッチボールしながら、どの曲からも新年にふさわしい、清新な響きが生まれそうです。ピアノ・トリオは、時代に合った解釈や自由度の点で、ほかの室内楽の編成よりもトライできるレンジが広いとも思います。思い切り楽しんで、今回もまた、トッパンホールで新しい表現を拓いてください。

（2023年7月取材）

聞き手：西巻正史（トッパンホール プログラミング・ディレクター）
インタビュー写真：藤本史昭／取材・文：トッパンホール

トッパンホール ニューイヤーコンサート 2024
2024年1月21日（日）15：00
日下紗矢子（ヴァイオリン）／ペーター・ブルンズ（チェロ）
フローリアン・ウーリヒ（ピアノ）
メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲第1番 ニ短調 Op.49
シューマン：子供の情景 Op.15
シュルホフ：ヴァイオリンとチェロのための二重奏曲
ブラームス：ピアノ三重奏曲第1番 ロ長調 Op.8
6,000円／U-25 3,000円　全席指定
特別協賛：鹿島建設株式会社

Zlatomir Fung & Alexandre Kantorow

奇跡のコラボレーションが浮き彫りにする、真の“デュオ”

柴田克彦

「ヴァイオリンあるいはチェロ・ソナタ」と称される作品の大半は、正式に言うと「各弦楽器と“ピアノ”のためのソナタ」だ。だが現実的には、弦楽器奏者を主役、ピアニストを伴奏者と見る傾向が強い。ピアノの方が至難または重要なケースが多いにもかかわらず……。その点を見直させるまさしく対等のデュオが、ズラトミール・ファン&アレクサンドル・カントロフである。

ズラトミール・ファンは、1999年ブルガリア系と中国系の両親のもとアメリカに生まれた。スズキ・メソードで学び、数々のコンクールで実績を残した後、2019年のチャイコフスキー国際コンクールのチェロ部門で、アメリカ人として40年ぶりの第1位を史上最年少で獲得。以降もジュリアード音楽院で研鑽を積み、協奏曲やリサイタルで聴衆に驚きを与えている。

アレクサンドル・カントロフも、22歳で挑んだ2019年のチャイコフスキー国際コンクールのピアノ部門で、フランス人として初めて優勝し、全部門のグランプリをも受賞した。父親は名ヴァイオリニストで指揮者のジャン=ジャック・カントロフ。早くから演奏活動を始め、2014年からCD録音を行うなど、目覚ましい活躍を続けている。

すなわち本公演は、2019年のチャイコフスキー国際コンクール優勝者同士のデュオだ。話題性抜群の受賞者が組んだこの奇跡のコラボレーション自体がまずは楽しみとなる。加えてファンに関しては、今回が日本の多くのリスナーにとって生演奏に触れる初の機会。その意味でも足を運ぶ価値がある。

しかしながら、世間が騒ぐコンクール実績などには囚われず、本物の実力者だけを出演させてきたのが、トッパンホールの主催公演だ。従って真に注目すべきは、各々の秀でた個性と高い音楽性、そしてそのコラボから生まれる“デュオ音楽”の行方にある。

映像等で知るファンの演奏には、ナチュラルな歌心が横溢している。卓越した技巧はもとより、表現が極めて細やかな上に、音楽が伸びやかで洗練されている。彼についてカントロフは「品格があって軽やかで、演奏は常に自然でまったく誇張がなく、演奏スタイルはピエール・フルニエを思わせる」と語っていたという。

かたやカントロフは強靭だ。近年来日を重ねている彼は、2021年11月当ホールの〈エスポワール スペシャル〉に登場し、力と意志が漲る凄絶な演奏を展開。聴く者を震撼&驚嘆させた。彼は力感と瑞々しさにあふれた演奏を行い、自己の表現を楽曲の本質に同化させながら、新鮮な魅力を生み出す。それに何より訴求力が圧倒的に強い。

今回の大きな妙味は、この“柔と剛”“曲線と直線”とも言うべき俊英デュオが紡ぎ出す音楽の姿である。相乗効果によってこれまでになく清新な音楽が生まれる可能性もあるし、相手に即して表現が変わり（その点が絶妙だったピアノのユジャ・ワンの例もある）、予想だにしない結果がもたらされる可能性も十分。もちろんぶつかったまま音楽が分裂するケースも有り得る。そのスリリングなステージがいたく興味をそそる。

プログラムがまた面白い。前半はシベリウスの《メランコリー》とグリーグのやや隠れた名作チェロ・ソナタ。北欧の憂愁と清冽な抒情を映す両曲はファンの持ち味にも合っている。後半はドイツ物で、最初はワーグナー（ポッパー編）の《ロマンス》。こちらもすこぶる美しい作品だ。ここまでは滅多にないラインナップゆえに、貴重な生体験ともなる。

そしてブラームスのチェロ・ソナタ第2番。当初発表されたショスタコーヴィチのソナタからこれに変更となった。何しろブラームスは、カントロフが「特別な存在」と語り、実演及びCDで快演を展開してきた作曲家。弦楽器ソナタにおけるピアノの比重も相当高い。しかも、明るく情熱的な曲調の中に穏当さや熟練の味わいを湛えた第2番は、二人の個性が佳き化学反応を起こす可能性が高い作品と言えるだろう。

興味津々の本公演。ここでぜひ対等のデュオの意味と真価を体感したい。

（しばた・かつひこ／音楽評論家）

ズラトミール・ファン（チェロ）&
アレクサンドル・カントロフ（ピアノ）
2023年12月12日（火）19：00
シベリウス：メランコリー Op.20
グリーグ：チェロ・ソナタ イ短調 Op.36
ワーグナー（ポッパー編）：ロマンス（アルバムの綴り）
ブラームス：チェロ・ソナタ第2番 ヘ長調 Op.99
6,000円／U-25 3,000円　全席指定
特別協賛：清水建設株式会社

Fauré Quartett

フォーレ四重奏団の“いま”

長木誠司

フォーレ四重奏団のトッパンホールによる主催公演は今回が4度目。来日するたびにどうしても聴きたくなってしまうのは、パシフィック・コンサート・マネジメントの主催だったものの、やはりトッパンホールで行われた2014年来日公演の印象が強すぎるためだ。そのときは、今回も取り上げるマーラーの四重奏曲のほか、R.シュトラウス、ブラームスというドイツ／オーストリア系ロマン派のピアノ四重奏曲がプログラムに上っていた。「フォーレ」という名称ではあるものの、ドイツのカールスルーエで結成された団体だから当然なのかも知れないが、フランスのようなドイツのような、このちょっとしたひねり具合はいつも気になっている。カールスルーエは名門の音楽大学を有するが、ドイツのなかでも有数の工科大学があり、また最新のテクノロジーを駆使したアートの中心機関ZKMもあって、いわば国際的な街。そんな街生まれの団体に、ドイツだのフランスだのといった区別から生じるイメージなど無用なものなのだろう。

とにかく、この2014年の演奏は壮絶だった。ことにメインとなっていたブラームスのピアノ四重奏曲第1番は、シェーンベルクのオーケストラ編曲版も好きで、ともによく聴く曲なのだが、フォーレ四重奏団の演奏は管楽器も打楽器もふんだんに含むオーケストラの色彩感などこの原曲にはいっさい不要とばかりに、4人の奏者が競り合いながらもよつに組んで、若書きとはいえ、ただでさえがっしりと創られたこの作品を、さらに目の詰み凝縮された響き、骨太ながら燦然と輝き続ける響きのなかに送り込んだ。絶えず流動する4つの楽器のバランスは、跳梁跋扈する小動物のように自在な緩急の変化を伴って聴き手の耳を襲う。そこに産み出された緊張の度合いは、終楽章の爆発的な速度感で、もうほとんど聴き手の理性的な限界を追い抜いたから、最後の音が鳴り止むか鳴り止まないうちに、猛烈なブラヴォーが──室内楽の演奏会なのに──トッパンホール全体を襲ったのもやむなしという感じだった。

コロナ禍の幾重もの障碍を乗り越えて実現した、前回2021年の来日公演では、まさにフォーレとブラームスを組みあわせた一夜があって存分に楽しんだのだが、このほかに、メンバーのなかのピアニスト、モメルツが編曲に係わったムソルグスキーの《展覧会の絵》をメインとする別プログラムがあった。残念ながらこの夜は聴けなかったものの、実は曲自体はCD化されていて、好んで聴いている。ピアノ四重奏はどうしてもピアノがバランス面で中心にはなるので、その意味でもアンサンブルのなかでのモメルツの位置が象徴的に現れている編曲であり演奏であった。フォーレ四重奏団にはエリオット・スミスやピーター・ガブリエルなどの歌をアレンジして演奏したCDもあり、同じ「編曲」ものでもえらい違いながら、楽しめる企画だった。もちろんこちらはモメルツの編曲というわけではないのだけれど、「本気」と「遊び」の両刀をうまく使い分けながら真剣に和気藹々できる団体っていいなと常々思っている。

今回の来日プログラムにはメンデルスゾーンのピアノ四重奏曲第3番がメインで入っている。メンデルスゾーンという作曲家の音楽史上の位置づけは、この30年ほどで大きく変わった。なんでも書ける神童、でもちょっとその音楽は軽くて…というようなかつてのイメージはどこかに飛んでしまい、同時代の音楽を常に見つめ続け、社会とも宗教とも真摯に取り組んだ、まさにオトナの音楽、それを創った人として研究もさかんに行われるようになった。そうした時代の動向を見据えてプログラムに採り入れるところは、前回の来日からヴァイオリン、ヴィオラが立奏するなど、常に自らを刷新しているフォーレ四重奏団の真骨頂だろう。この団体のいまの姿をまさに反映したプログラム、それをぜひ楽しみたい。

（ちょうき・せいじ／音楽評論家）

フォーレ四重奏団
2023年12月7日（木）19：00
マーラー：ピアノ四重奏曲断章 イ短調
ベートーヴェン：ピアノ四重奏曲 変ホ長調 Op.16
メンデルスゾーン：ピアノ四重奏曲第3番 ロ短調 Op.3
6,000円／U-25 3,000円　全席指定
特別協賛：株式会社 竹中工務店

公開マスタークラス
2023年12月6日（水）　＊詳細はWEBサイトにてご案内します

SCHEDULE 2023.11～2024.3 主催公演

トッパンホールチケットセンター (10:00～18:00 土日祝休) 03-5840-2222

日時			公演
10／31	(火) 19:00		〈ハーゲン プロジェクト 2023〉 **ハーゲン・クァルテット**(全3夜) 特別協賛：鹿島建設株式会社
11／1	(水) 19:00		
11／2	(木) 19:00		
11／24	(金) 19:00		**ティル・フェルナー**(ピアノ) 特別協賛：株式会社 安藤・間
12／7	(木) 19:00		**フォーレ四重奏団** 特別協賛：株式会社 竹中工務店
12／12	(火) 19:00		**ズラトミール・ファン**(チェロ)**＆アレクサンドル・カントロフ**(ピアノ) 特別協賛：清水建設株式会社
1／14	(日) 15:00		**鈴木優人**(チェンバロ) **J.S.Bachを弾く 3 ― 平均律第2巻** 特別協賛：東急建設株式会社
1／21	(日) 15:00		**トッパンホール ニューイヤーコンサート 2024** 日下紗矢子(ヴァイオリン)／ペーター・ブルンズ(チェロ)／フローリアン・ウーリヒ(ピアノ) 特別協賛：鹿島建設株式会社
1／23	(火) 19:00		**イアン・ボストリッジ**(テノール)、**アレッシオ・アレグリーニ**(ホルン)、**ジュリアス・ドレイク**(ピアノ) 特別協賛：株式会社 安藤・間

日時			公演
2／13	(火) 19:00		**イリア・グリンゴルツ**(ヴァイオリン) ― **無伴奏**
2／16	(金) 19:00		**Trio Rizzle meets イリア・グリンゴルツ**(ヴァイオリン)
3／10	(日) 17:00		**岡本侑也**(チェロ) ― **無伴奏 Ⅱ** 特別協賛：株式会社 安藤・間
3／13	(水) 19:00		**アレクサンドル・メルニコフ**(ピアノ) 特別協賛：鹿島建設株式会社
〈ランチタイムコンサート〉 トッパンホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート ［全席指定］			
12／15	(金) 12:15		**Vol.125　大瀧拓哉**(ピアノ)　**希望に向かって**
2／6	(火) 12:15		**Vol.126　中 恵菜**(ヴィオラ)

※開場は開演の30分前となります。
※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービスをご利用いただけます［有料・要予約］。
お申し込み・お問い合わせは(株) マザーズ 0120-788-222まで。

2023年10月中旬現在

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます　www.toppanhall.com

INFORMATION

美しき愛器とともに――バッハの崇高なる世界へ

日本クラシック音楽界を代表する存在として、コロナ禍を機に、ひときわその輝きを増した鈴木優人。旺盛な指揮活動で活躍の場を広げるいまでは、19世紀のシンフォニーから現代音楽、ときにオペラまでを手がけるに至っているが、そのバックボーンは、生まれ育った環境から選びようもなくJ.S.バッハであり、演奏家としての原風景は、幼き日に家で触れたチェンバロにある。

本シリーズは、外来演奏家の入国が厳しかったコロナ禍のただなかにあって、多忙を極める鈴木に、彼が“自分の出発点”と語るトッパンホールで音楽家としての原点に改めて向き合ってほしい、との願いから企画された。

2021年11月の第1回で奏されたのは、《平均律》第1巻。公演前日にはレクチャーも開催し、舞台にかける熱気を最高潮にあたためての本番だった。物心つく以前からJ.S.バッハと不可分な人生をおくり、自らの意思で大作曲家と向き合ってきた鈴木の演奏は、微に入り細を穿つ説得力に満ち、考え抜かれた音像の見事さ、確かさには、満場の客席から万雷の拍手が惜しみなく贈られた。続く今年2月の第2回では《パルティータ》全曲に取り組んで、バッハが作品に凝らしたさまざまな創意を次々に浮かび上がらせて、その醍醐味を弾き切った。

そして迎える、最終回。シリーズスタート前のインタビューで鈴木は、「なぜバッハを弾き続けているのか、今回のシリーズで分かるといいと思う」と語っていた。彼が3回の舞台を通して最後、どんな境地に至るのか、その行方を聴き届けよう。

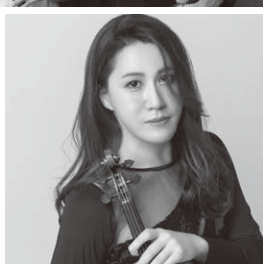
鈴木優人(チェンバロ)
J.S.Bachを弾く 3 ― 平均律第2巻
2024年1月14日(日) 15:00
J.S.バッハ：平均律クラヴィーア曲集第2巻 BWV870 ～ 893
5,500円／U-25 2,500円　全席指定
特別協賛：東急建設株式会社

しなやかな感性と知性で魅了

数多の新しい才能をご紹介してきたトッパンホールの〈ランチタイムコンサート〉。12月にスポットを当てるピアノの大瀧拓哉は、超人的なテクニックで現代音楽のスペシャリストとして名高い名手トーマス・ヘルの弟子で、2016年オルレアン国際ピアノコンクール優勝の実力者です。ソロ、室内楽、協奏曲のソリスト、現代音楽の初演など、多岐にわたる活動を行うなか、力を入れているのがアメリカの作曲家フレデリック・ジェフスキの紹介。今回はそのジェフスキに、神々しいまでの美しさをまとったベートーヴェン後期のソナタとベルクを対比させた壮大なプログラムに挑みます。どうぞご期待ください。

〈ランチタイムコンサート Vol.125〉
大瀧拓哉(ピアノ)　**希望に向かって**
2023年12月15日(金) 12:15
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第30番 ホ長調 Op.109
ベルク：ピアノ・ソナタ Op.1
フレデリック・ジェフスキ：ノース・アメリカン・バラード第4番《ウィンズボロ綿工場のブルース》(1979)
入場無料(要予約／お一人様2席まで)
受付期間：2023/11/6(月)～11/24(金)
お申し込み方法：ハガキ(抽選制・当選者のみ通知)
〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3
トッパンホールチケットセンター「ランチタイムコンサート Vol.125」受付係
(住所、氏名(フリガナ)、電話番号、希望席数を明記ください。)

2023/2024シーズン主催公演［後期］ラインナップ最新一覧



心震わす名演を届けてくれるプレガルディエン＆ゲース、卓越した技巧と緻密なアンサンブルに圧倒されたベルチャQの帰還。ホール23周年のバースデー公演での熱演が記憶に新しい、クァルテット・インテグラ、周防亮介に、辻彩奈＆阪田知樹の人気デュオの登場と、円熟の名手から意欲漲る若手まで、シーズン後期も刺激的な顔ぶれが並びます。どうぞご期待ください。

＊各公演の詳細は追ってご案内いたします。

2024年		
5/22(水) 19:00 5/24(金) 19:00	〈歌曲の森〉～詩と音楽 Gedichte und Musik～ 第29篇、第30篇 **クリストフ・プレガルディエン**(テノール) ＆ **ミヒャエル・ゲース**(ピアノ) ★	2/7 発売
5/30(木) 19:00	**クァルテット・インテグラ**	
6/28(金) 19:00	**ベルチャ・クァルテット**	2/28 発売
7/19(金) 19:00	**辻 彩奈**(ヴァイオリン) ＆ **阪田知樹**(ピアノ) ★	3/27 発売
8/8(木) 19:00	**周防亮介**(ヴァイオリン) **イザイ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ全曲** ★	
8月	**谷 昂登**(ピアノ) ＆ **水野優也**(チェロ) ★	

※発売日は変更になる可能性があります。記載の発売日は一般発売日です。
※★印はセット券をご用意しています。
※最新情報はオフィシャルWEBサイトでご確認ください。

幸福感満ちる究極のデュオ

ヴァイオリニストである両親のもとに生まれ、3歳からヴァイオリンを始めた髙木凜々子。音楽があふれる環境の中で育まれた才能は、2017年バルトーク国際コンクールをはじめとする国内外のコンクールでも高い評価を受け、その多彩な活動は常に多くの人の注目を集めています。彼女の音楽の最大の魅力は、聴く人の心を満たす幸福感。作品に真剣に向き合う姿と、伸びやか且つ華やかなキャラクターも幅広い支持を得ています。

一方のエヴァン・ウォンは、2016年仙台国際音楽コンクールで強烈なインパクトを残し、着実にキャリアを重ねる実力派ピアニスト。今回が初共演の髙木とどんな世界を描き出すのか、さらには《月光》《ラ・ヴァルス》に聴く洗練されたクリアな音にも期待が高まります。

才能豊かなふたりがトッパンホールのステージで新たな輝きを放つ究極のデュオ――どうぞお聴き逃しなく！

髙木凜々子＆エヴァン・ウォン デュオ リサイタル
2023年11月14日(火) 19:00
髙木凜々子(ヴァイオリン)／エヴァン・ウォン(ピアノ)
ベートーヴェン：ピアノ・ソナタ第14番 嬰ハ短調 Op.27-2《月光》
ラヴェル：ラ・ヴァルス／ツィガーヌ
ヘンデル：ヴァイオリン・ソナタ第1番 イ長調 Op.1-3
ブラームス：ヴァイオリン・ソナタ第3番 ニ短調 Op.108
全席指定：5,000円／学生2,500円(主催者のみ取り扱い)
主催・お問い合わせ：ヤタベ・ミュージック・アソシエイツ 03-3787-5106

チケットのお申し込み：トッパンホールチケットセンター

表紙：ペーター・ブルンズ

ドイツを代表する名手ブルンズの初登場公演より、味わい深いチェロの響きが伝わるようなカットを。その雄弁で奥行きのある語り口は常に心を打ち、2020年のニューイヤー公演では、ハイドン《チェロ協奏曲第1番》で日本の聴衆にその圧倒的存在感を知らしめました。久々の登場となる今回(2024年1月)も、濃密なアンサンブルが響く贅沢なひとときに期待大です。

編集後記

特集記事の日下紗矢子さんへの取材は、今年7月に行いました。日本の夏の蒸し暑さを吹き飛ばすような爽やかな笑顔でご来館、笑い声が絶えない楽しい時間になりました。共演者やプログラムのこと、紙面の都合で泣く泣く割愛したトッパンホールの思い出など、たくさんお話しくださったなか、〈エスポワール〉をきっかけに今も共演を重ねるペーター・ブルンズさんの話になると、笑顔が一段と輝きを増していたように感じました。そこまで日下さんを虜にしてやまないブルンズさんの魅力は、ぜひ来年1月のニューイヤーコンサートで！　(雪)

発行日:2023年11月1日　発行・編集:株式会社トッパンホール 広報部　〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3　(03)5840-2200　https://www.toppanhall.com/　制作:株式会社トッパングラフィックコミュニケーションズ　印刷:TOPPAN株式会社
©TOPPAN HALL 2023.11 KI
※当紙に掲載している内容について、許可なく複製あるいは転用することを固く禁じます。